

機関番号：32305

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20720152

研究課題名(和文)

日本人英語学習者の「音読力」のメカニズムと「音読」指導の効果についての検討

研究課題名(英文)

Oral Reading Proficiency of Japanese EFL Learners and the Effects of the Oral Reading Instruction on Their Language Learning

研究代表者

清水 真紀 (SHIMIZU MAKI)

高崎健康福祉大学・薬学部・講師

研究者番号：60433637

研究成果の概要(和文):

本研究は、(1) 英語能力テストとして実施される音読テストはどの程度の信頼性を有しているか(特に評定者トレーニングと観点別評価に焦点を当てて)、(2) 音読パフォーマンスに英語学習者のどのような技能が反映されているか、(3) 音読力と言語能力発達との関連で、近年、注目されている音韻的作動域記憶(phonological working memory; PWM)の測定方法と他技能との関連について検討を行ったものである。

研究成果の概要(英文):

This study examined (1) the reliability of oral reading tests administered for measuring test-takers' English language proficiency (particularly, focusing on rater training and criterion-referenced evaluation), (2) EFL learners' skills reflected on their oral reading performances, and (3) a measurement task for phonological working memory from the viewpoint of the relation between the oral reading practice and language learning.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語学習、音読、第二言語習得論、教授法

## 1. 研究開始当初の背景

当時の学習指導要領(文部省, 1998, 1999)において「実践的コミュニケーション能力」の養成が目標に掲げられたことを受けて、学校現場では音声面を重視した活動が盛んに行われるようになった。「読む」活動も例外ではなかった。「音読ブーム」とも言われる中(門田, 2007)、教室では斉読、Read and Look Up、自由読み(Buzz Reading)など多様な音

読活動が盛んに展開されていた(金谷, 2002; 高梨・卯城, 2000)。

また、音読は、実用英語技能検定(日本英語検定協会)の二次試験をはじめ、英語能力を評価する場面でもしばしば用いられている。しかし、これほどまで音読が指導および評価場面で用いられているにもかかわらず、学習者のどのような技能が音読に反映されるのか、また、音読活動は学習者の英語能力

の発達にどのような効果を及ぼすのかについては依然、明らかにされてこなかった。

## 2. 研究の目的

本研究は、認知心理学および心理測定に関する学術分野の成果に基づきながら、未開拓分野である日本人英語学習者の音読力のメカニズム全体像に迫り、さらに音読指導の教育的効果について具体的な検討を加えることを目的とするものであった。

## 3. 研究の方法

本研究では以下一連の研究を行った。

(1) 音読テストの信頼性（一貫性）に焦点をあて、評価者トレーニングによってそれをいかに高めることができるかについて調査を行った。手続きとしては、英語教員2名が参加し、評定者としての構え有り条件と構え無し条件の下、それぞれ大学生英語学習者26名の音読テストパフォーマンスの評価を行った。

(2) 音読パフォーマンスには英語学習者のどのような技能が反映されているかについて明らかにするため、日本国内の大学生26名を対象に、文章音読課題、L2リーディング能力テスト、英語語彙知識テスト、リーディングスパンテスト、英語文法知識テスト、単語認知課題、音韻処理課題、正書法処理課題を実施した。分析には、スピアマンの順位相関を用いた。

(3) 音読力と言語能力発達との関連で注目されている音韻的作動記憶 (phonological working memory; PWM) の日本語版測定課題の開発に取り組み (本報告書では省略)、さらに日本国内の大学生25名に対して、英語版 PWM 課題 (CNRep; Gathercole & Baddeley, 1996)、日本語版 PWM 課題、英語語彙サイズテスト (望月, 1998)、TOEIC Bridge リスニングテスト (ETS, 2007) を実施し、スピアマンの順位相関分析により PWM と各課題との関係を明らかにした。

## 4. 研究成果

(1) 評定開始前に互いに評定方法について話し合った場合のほうがそうでない場合よりも、観点別5段階評定が機能するとの結果になった ( $F$ 検定)。その一方で、評定方法の確認を事前にするまでもなく、2人の評定者間にはすでに十分な信頼性があり (相関分析および一般化可能性理論)、またかえってそうすることで、一部信頼性の観点からは望ましくない結果もみられた (一般化可能性理論)。さらに、音読テストの評定場面における妥当な評定者数および観点の数については、2人で3観点以上とのラインが示された (一般化可能性理

論)。

(2) L2リーディング能力と音読パフォーマンスとの間には、.67 ( $p < .01$ ) ~ .68 ( $p < .001$ ) とかなりの相関があることが明らかになった。さらに、音読と語彙知識、文法知識、単語認知とは、各々.72-.76, .70, .67-.77の高い相関が示された。また、音読と正書法処理については、音読パフォーマンスが観点別評価された場合には有意な相関、-.45を示したが、音読速度をもとに評価された場合には何ら有意な関係は見られなかった。そして、リーディングスパンテストと音韻処理課題の2つに関しては、音読との関連は見られなかった。

(3) CNRep と英語語彙サイズテスト、日本語版 PWM 課題と英語語彙サイズテストの間には有意な相関が見られなかった (それぞれ-.05, -.11)。これに関しては、語彙知識がある学習者はかえって PWM 課題で提示された無意味綴りの非単語も有意化しようとして失敗した可能性を指摘することができる。一方で、CNRep と TOEIC Bridge の間には.50、そして日本語版 PWM 課題と TOEIC Bridge の間には.53の中程度の相関があることが示された。つまり、学習者が非単語を作動記憶内でリハーサルし正確に復唱できる能力が、英語4技能のリスニングとも関連することが明らかにされた。今後の課題としては、文献研究及び実証的研究により、この PWM と音読の関係についてさらに精査していくことが求められている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

山口陽弘、清水真紀、音韻的作動記憶と英語熟達度の関係の検討II: 日本人大学生を対象として、群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編、査読有、60巻、2011、pp. 233-242

山口陽弘、清水真紀、音韻的作動記憶と英語熟達度の関係の検討I: 日本人大学生を対象として、群馬大学教育実践研究、査読有、27号、2010、pp. 281-290

Maki Shimizu, An examination of reliability of an oral reading test for EFL learners using generalizability theory、ARELE (Annual Review of English Language Education in Japan)、査読有、20巻、2009、pp. 181-190

山口陽弘、清水真紀、英語学習者のための音読テストの信頼性の検討: 一般化可能性理論の適用と第二言語習得への示唆、群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編、査読無、58巻、2009、pp. 155-168

〔学会発表〕(計4件)

清水真紀、山口陽弘、音韻的作動記憶と英語熟達度の関係の検討：日本人大学生を対象として、第36回全国英語教育学会大阪研究大会、2010年8月7日、関西大学(大阪府)

山口陽弘、清水真紀、音韻的作動記憶と英語熟達度との関係：日本人大学生を対象として、日本教育心理学会第52回総会、2010年8月27日、早稲田大学(東京都)

山口陽弘、清水真紀、英語学習者のための音読テストの信頼性の検討：一般化可能性理論の適用と第二言語習得への示唆、日本教育心理学会、2009年9月20日、静岡大学(静岡県)

清水真紀、英語学習者のための音読テストの信頼性、第34回全国英語教育学会東京研究大会、2008年8月9日、昭和女子大学(東京都)

〔図書〕(計1件)

卯城祐司、研究社、英語リーディングの科学：「読めたつもり」の謎を解く、2009、pp. 63-74

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 真紀 (SHIMIZU MAKI)

高崎健康福祉大学・薬学部・講師

研究者番号：60433637